



本との出会いを求める子どもたち～読書旬間から～

今、学校は読書旬間の真っ最中。図書委員会が各学級を回って、自分のお薦めの本を紹介し（写真左端）、楽しいスタンプラリーを展開しています。子どもたちは、スタンプと、ご褒美のしおりの魅力をきっかけにしながらも、楽しい本の世界との出会いを求めてどんどん本を借りています（左から2番目3番目の写真）。おかげで、図書室は、お好みの本を探す子どもたちで賑わっています（写真右端）。

本との出会いで、子どもたちの心が耕されることを願っています。



和
気
香
風

「心を耕す」ということ～本との出会い、みなみっ子集会から～

「心を耕す」を検索すると、AIによる概要が返ってきます。「心を耕す」とは、知識や経験を積み重ねて心を豊かにし、柔軟で開かれた状態にすることを意味します。具体的には、教養を深めたり、様々な経験をしたり、物事を多角的に見れるように努めることを指します。「心を耕す」という言葉は、文字通り「畑を耕す」ように、**心という大地を肥沃にし**、良いものを育てるための努力を重ねることを表しています。お釈迦様の言葉にも「我もまた、田を耕すものなり」という言葉があり、日々の修行や、仏様の教えを心に染み込ませることで、心を耕すことの大切さを説いています。（Google 検索より）

さて、みなさんは、「アリとキリギリス」というイソップ物語をご存知ですね。働き者のアリに、遊び好きのキリギリス。アリは夏のうちから冬に備えて食べ物を蓄えますが、キリギリスは働きもせず歌ってばかり。冬が来てキリギリスは、アリに物乞いをします。でも、アリはそれを断り、キリギリスは困ってしまいます。このようなお話です。



この話を通して、目先の楽しさばかり追い求める愚かさや、苦痛や危険に遭わぬためには、あらゆることにおいて不用意であってはならないという教訓を教えられました。同時に、「働かざる者食うべからず」という言葉も教えられたような気がします。

実はこの話には、異なった二つの結末があるのです。アリがキリギリスに食べ物を分けてやらない話と、食べ物を分けてやる話の二つが存在するのです。原点は前者で、後者は後に変遷を経てきたようです。その食べ物を分けてやる話は**日本で誕生**しました。しかも、この**熊本の天草**で。

1593年、ヨーロッパから持ち込まれた活字印刷技術を用いて、キリスト教宣教師らの手によって印刷された「イソポのハブラス」では、アリはキリギリスを助けてやる話になっています。**チャンスがありながら準備を怠った個人の責任を厳しく問うヨーロッパ人的倫理観から、集団・共同体の中での助け合いが重視される日本人的倫理観への変換**だったのでしょう。

この「イソポのハブラス」はキリスト教弾圧とともに姿を消し、江戸時代から昭和の初期までは、「アリはキリギリスを助けない」話が一般的でした。

そして、第二次世界大戦後、日本では、「アリがキリギリスを助けてやる」という話が数多く作られました。出版物のおおよそ6割が「助けない」で、4割が「助ける」となっています。

さらに、国によって、話の結末は違うのです。「助ける」話が主流の国もあります。その国の歴史や、そこから生まれる価値観によって、変わっているのです。

みなさんは、きっぱり断って**自立心を植えつける**西洋流と、苦しい時には**互いに助け合う**日本流と、どちらが子どものために役立つ教訓だとお考えでしょうか。

ちなみに、私は、「どちらもいい」と考えます。私は、オーケストラの指揮者ごとの「聴き比べ」が好きで、特にカラヤンとズービン・メータの聴き比べは驚きです。同じ曲なのに、指揮者によって、こうも曲の捉え方と表現が変わるのかと唖ります。どちらも最高なのです。